

神戸女学院岡田山キャンパスの野鳥

野寄玲児^{*1}、森 美季^{*2}、永野実里^{*2}、
野上佳代^{*2}、西原光恵^{*3}

Avifauna of the Okadayama Campus, Kobe College, Western Japan

NOZAKI Reiji^{*1}, MORI Miki^{*2}, NAGANO Misato^{*2},
NOGAMI Kayo^{*2}, NISHIHARA Mitsue^{*3}

*1神戸女学院大学 人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 教授

*2神戸女学院大学 人間科学部 人間科学科 卒業生

*3神戸女学院大学 人間科学部 GP 推進室 派遣職員 (人間科学部 人間科学科 卒業生)

連絡先：野寄玲児 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学人間科学部環境・バイオサイエンス学科
nozaki@mail.kobe-c.ac.jp

要 旨

本報告は、兵庫県西宮市の神戸女学院岡田山キャンパスに生息または飛来する野鳥についてとりまとめたものである。神戸女学院は1875年に神戸市山本通に設立されたが、1933年に西宮市岡田山に移転し、この地で80有余年の歴史をもつ。キャンパスの総面積は14ha、その35%に相当する約5haがクスノキやヒメユズリハ、コナラなどからなる鬱蒼とした天然林に被われており、良好な自然環境が保たれている。岡田山キャンパスの鳥類相については、1974年刊行の「岡田山の自然」に43種、1982年の増補改訂版に8種が追加され、計51種の野鳥が記録されている。また、2010年にはキャンパスの自然環境に関する報告書がまとめられ、34科88種の野鳥が報告されている。既存資料および1991年以降の主として第一著者による観察、および2003年度から2005年度にかけて行われたルートセンサスの結果を合わせると、岡田山キャンパスではこれまでに35科93種の野鳥が確認されていることが明らかになった。全93種のうち、岡田山キャンパスとその周辺域で繁殖していると考えられる留鳥は33種で、ヒヨドリ、スズメ、ハシブトガラス、キジバト、ムクドリ、メジロなどが主なものである。夏季日本で繁殖し、東南アジア等の熱帯域で越冬する夏鳥は26種で、ツバメ、サンショウクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリなどが主なものである。このうち、本学とその周辺域で確実に繁殖しているのはツバメのみで、他は本学を春と秋の2回通過する旅鳥型の夏鳥である。おもに日本以外の北方域で夏季繁殖し、岡田山を含む西日本で越冬する冬鳥は12種で、ツグミ、シロハラ、ジョウビタキ、シメなどが主なものである。北日本や山岳域で夏季繁殖し、岡田山を含む西日本で越冬する漂鳥は18種で、ウグイス、ルリビタキ、アオジなどが主なものである。日本以外の地域で繁殖・越冬し、春と秋に岡田山キャンパスを通過する旅鳥は4種で、オオムシクイ、マミチャジナイなどが主なものである。

キーワード：鳥類相、生息区分、神戸女学院、岡田山キャンパス、野鳥

Summary

To clarify the avifauna of the Okadayama Campus, Kobe College, western Japan, we investigated the wild bird species that inhabit or come flying over the campus, by observations and the route census method. Okadayama campus is located in the southeast corner of Hyogo Prefecture and has an area of ca. 14 ha and elevations from 8 to 50 m above sea level. The campus lies in the warm-temperate zone and is under the influence of Seto Inland Sea climate. Nearly 35% of the campus is occupied by semi-natural forests dominated by evergreen broad-leaved trees such as *Cinnamomum camphora*, *Daphniphyllum teijsmannii*, *Quercus glauca*, and *Ilex rotunda* and deciduous broad-leaved trees such as *Quercus serrata*, *Celtis sinensis*, and *Aphananthe aspera*. The forest has been isolated by urbanization, and appears as a “green island” in an urban landscape. In the Okadayama Campus, 93 bird species belonging to 35 families have been recorded thus far. Out of the 93 bird species, 33 are resident breeders that breed in and around the campus, such as *Hypsipetes amaurotis*, *Passer montanus*, *Streptopelia orientalis*, *Corvus macrorhynchos*, and *Spodiopsar cineraceus*. Twenty-six species are migrant breeders that breed in the Japanese Archipelago and winter in the Asian tropics. However, most of the migrant breeders do not breed in and around the campus; they merely pass through the campus in the spring and autumn seasons, except for *Hirundo rustica*. Twelve species are winter visitors that breed in boreal regions and winter in southwestern Japan, including the Okadayama Campus, such as *Turdus pallidus*, *T. naumanni*, *Phoenicurus auroreus*, and *Coccothraustes coccothraustes*. Eighteen species are vagrants that breed in the northern or montane regions of central Japan and winter in the campus, such as *Cettia diphone*, *Tarsiger cyanurus*, and *Emberiza spodocephala*. Four species are migrants that breed in boreal regions and winter in the Asian tropics, such as *Phylloscopus examinandus* and *Turdus obscurus*.

Keywords: avifauna, breeding status, Kobe College, Okadayama Campus, wild birds

本報告は、兵庫県西宮市の神戸女学院岡田山キャンパスにおいて観察された野鳥についてまとめたものである。神戸女学院は1875年に神戸市山本通に設立され、1933年に西宮市岡田山に移転してきた（神戸女学院百年史編集委員会編 1976）。岡田山キャンパスは80有余年の歴史をもち、現在では大学3学部5学科、大学院および中学・高等学部の学生・生徒約3500名が学んでいる。

近年、生活環境の一部として、また自然教育の場として身近な自然が各地で見直されており、大学キャンパスにおいても構内や周辺地域の鳥類を自然教育や理科教育に活用するための調査・研究がいくつか行われている（川西 1996；桜谷 1996；浅川ほか 2003；西 2007；竹内ほか 2010など）。野鳥は個性性が明確であること、サイズに著しい種差がないこと、おもに昼行性で人前にもよく出現すること、特徴的な鳴き声から種や個体数を推定できること、草原や森林など特定の環境条件をよく指標することなど、初歩的な生態学の学習に好適な素材といえる。大学構内に生息する鳥類の目録を公表している大学も十数大学（河崎ほか 1981；山田・高見 1986；堤・松沢 1990a、b；川西 1996；桜谷 1996；原田ほか 1998；浅川ほか 2003；佐藤ほか 2003；申 2004；西 2007；佐藤ほか 2007；生稲・中村 2010；竹内ほか 2010；村田ほか 2011など）におよぶが、野鳥関係のサークルやクラブが研究活動を行っている大学も多く、中には優れた報告がまとめられている例（東京農工大学野鳥研究会編 1980）もある。

岡田山キャンパスの鳥類相については、1974年刊行の「岡田山の自然」（岡田山の自然編集委員会編 1974）の生物目録に43種の野鳥が記録されている（表2参照）。目録には「過去15年間に亘って視聴された野鳥」とあるので、1960年代以降の観察記録がまとめられていることになる。そして、1982年の増補改訂版（神戸女学院環境保全委員会編 1982）ではこれに8種が追加されているので、計51種の野鳥が記録されていることになる。筆者の一人野寄は、1991年に本学に着任して以来キャンパスの野鳥の観察を行っており、2003年度から2005年度には複数のメンバーでルートセンサスを行っている。また、2010年にはキャンパスの自然環境に関する報告書を取りまとめ、34科88種の野鳥を報告している（野寄 2010）。本報告はこれらの知見をもとに、岡田山キャンパスの鳥類相の全体像を、過去約半世紀にわたる自然環境の変遷に留意しながら明らかにすることを目的とした。

本報告をまとめるにあたって、増補改訂版を含む「岡田山の自然」の野鳥の項の執筆者である本学保健診療所元課長の前多純氏（1955年着任、1994年退職）には、1990年以前のキャンパスにおける野鳥の生息状況について貴重なご教示をいただいた。また、本学元非常勤講師の松原始博士（現：東京大学総合研究博物館）には、数種の野鳥の観察記録をご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

岡田山キャンパスの自然環境

岡田山は兵庫県南東部、西宮市の南部、東経135°21'、北緯34°45'に位置している（図1）。地形的には洪積台地に分類され、岡田山の北側の上ヶ原地区とともに六甲山地の南東麓を縁取

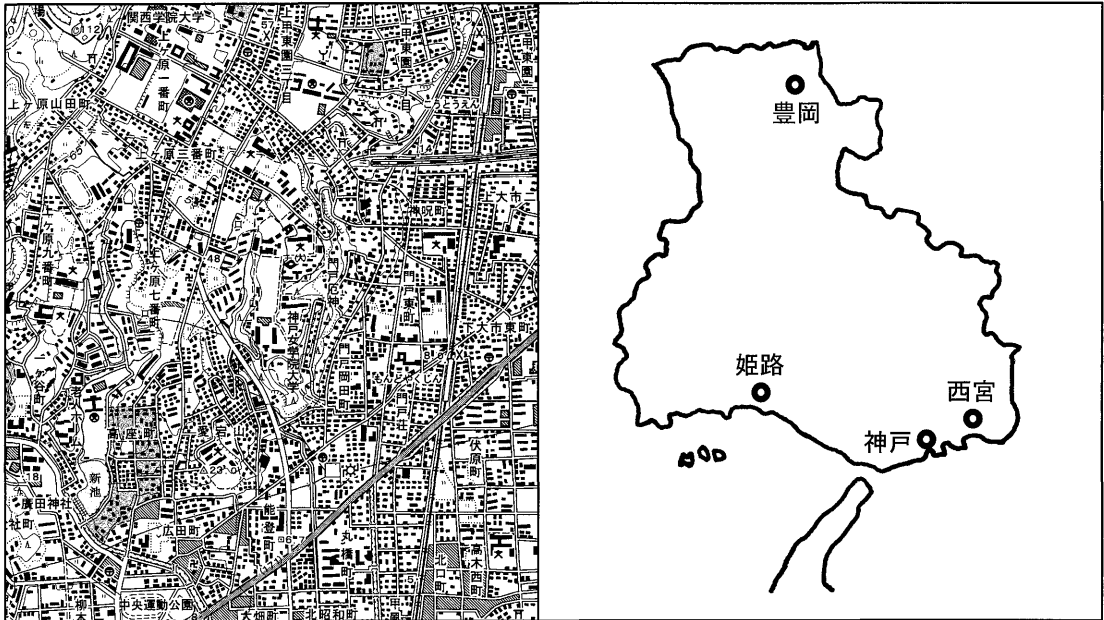


図1. 西宮市の位置と岡田山の地形図（国土地理院発行、1：25,000 宝塚図幅より）。

る上ヶ原台地に属し、その最南東端の一角を占める。地形は、西・南・東の三方が開けた半島状を呈しており、西側と東側には段丘崖の急斜面が卓越し、南側は小さな谷を伴う開析の進んだ斜面からなっている（図1および図3参照）。北側は、隣接する関西学院聖和キャンパスを経てさらに、甲山の麓に位置する関西学院上ヶ原キャンパスまではほぼ平坦な地形が広がっている。地質は上ヶ原台地の表層を被う上ヶ原礫層とその基盤をなす中期更新世の大阪層群からなり、下部には粘土層や砂礫層が、上部には砂礫に花崗岩等の円礫が混ざる地層が堆積している（藤田ほか 1959）。

神戸女学院岡田山キャンパスは、この岡田山の大部分を占めている。キャンパスの総面積は約14ha、その約35%に相当する5haが天然林に被われており、地域の自然環境保全や景観形成に果たす役割は大きい（野寄 2013）。標高は西宮市街地に続く正門下の沖積低地面で約8m、主力建物群が建ち並ぶ台地上の平坦面で約48mであり、約40mの比高を持つ。キャンパスの森は沖積低地と台地平坦面との間の斜面を中心に成立し、狭い道路を隔てて隣接する東光寺（門戸厄神）境内林（0.3ha）等を除くと、住宅地に取り囲まれた状態で完全に孤立しており、まさに市街地に浮かぶ緑の島のような状態にある（図2）。1haを超えるまとまった広さの森は、甲山山麓の山田町や広田神社林など、最も近いものでも1km以上離れている。

キャンパスとその周囲には湖や河川などの大きな開放水域はなく、キャンパス西縁を流れる四十谷川、南東を流れる津門川ともに水路のような小河川である。水鳥類が棲息する2級河川の武庫川はキャンパスの東約2km、高座町新池（約2ha）は南西約650mの位置にある。

気候は温和で、神戸女学院高等学部での1964-1971年の観測値（岡田山の自然編集委員会編 1974）によると、年平均気温15.4℃、年降水量1296mm、気候区分では盛夏や冬に雨の少ない瀬戸内式気候に属する。温度的には暖温帯域の下部に相当し、暖かさの指数126.9℃・月、最寒月である1月平均気温も3.8℃あり、冬鳥の越冬にも好適な環境を備えている。



図2. 西宮市街（阪急電鉄西宮北口駅）からみた岡田山（2013年撮影）。背景の山並みは六甲山地。市街地の背後の森に被われた高台が神戸女学院岡田山キャンパス。

植生の概観

岡田山キャンパスの現在の植生について概観すると、斜面の大部分はコナラやアベマキ、エノキといった夏緑広葉樹に、クスノキやアラカシ、ヒメユズリハ、モチノキ、クロガネモチなどの照葉樹が混交するよく発達した天然林で被われている（野寄 2010）。この森は、約80年前の移転当初のアカツクを主体とする雑木林から、当地域の気候的極相である照葉樹林への遷移途上にある。中でも、東側斜面の一角を占める谷門周辺には、学内で最も発達した森林がみられ、ヒメユズリハやクスノキ、アラカシなどの常緑広葉樹が優占して鬱蒼とした照葉樹林を形成している。キャンパスの森には、クスノキやヤブニッケイ、モチノキ、クロガネモチ、ヒメユズリハ、エノキ、ムクノキなど、液果をつける樹木が多いが、これは当キャンパスの森が野鳥による種子散布（被食散布）によっておもに成立してきたことを示している。神戸女学院が岡田山に移転して16年目にあたる1949年当時の写真では（岡田山の自然編集委員会編 1974）、岡田山の斜面の大部分はアカツクの雑木林に被われていたが、西山地区にはススキ草原が広がり、その中にアカツクの高木が散在するパークランド的な景観が広がっていた。こうしたアカツクやコナラを主体とする雑木林的な森林は、1970年代の半ば頃までは岡田山で卓越していたようであるが、谷門の森など一部の森林では当時既にクスノキやアラカシといった照葉樹が目立ち始めていたようである。

大学、中学・高等学部、グラウンド、学生寮などがある台地の平坦面は、建物群を除くと主に植栽樹群地や芝草地からなる庭園となっている。植栽樹群地はサクラやクスノキ、イロハモミジ、イヌマキ、ツバキなどの各種の樹木が植えられ、定期的に剪定、除草が行われている。

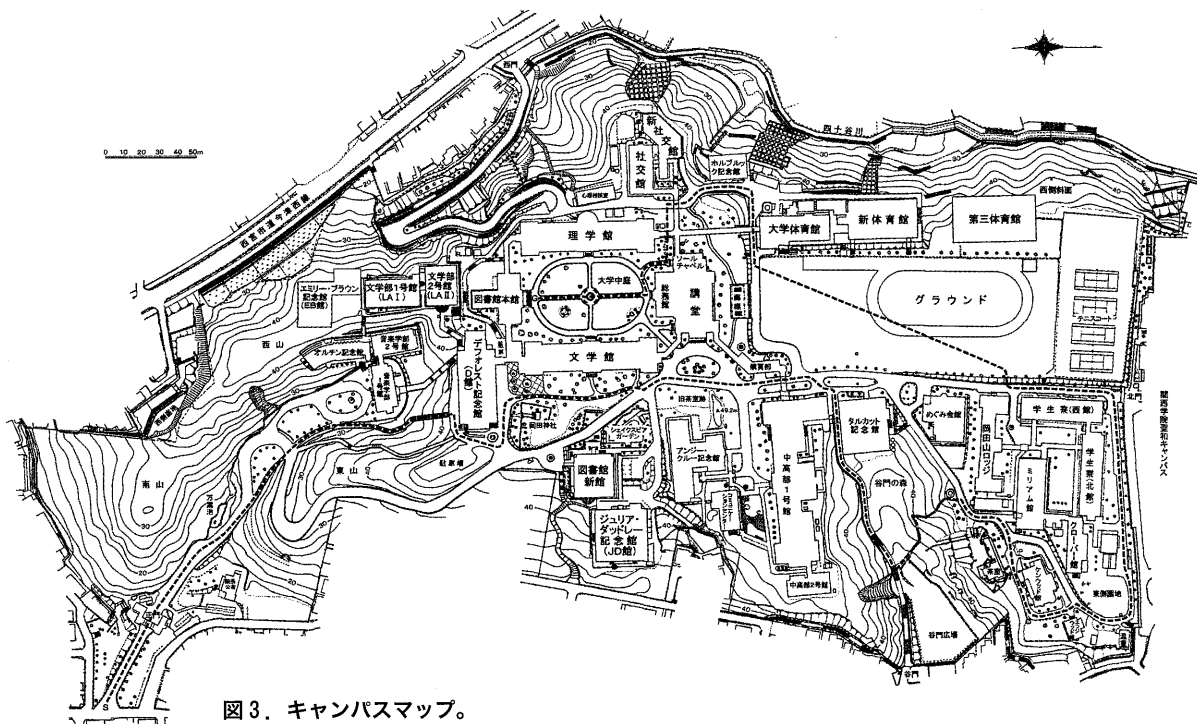


図3. キャンパスマップ。

破線は2003年度～2005年度に実施したセンサスのルートを示す (S: 始点, G: 終点)。

植栽樹群地は、繁殖期にはスズメやカラ類、エナガ、コゲラ、キジバトなどの営巣、採餌地となり、冬季には、シロハラやジョウビタキ、ルリビタキ、アオジなどの越冬地となる。グラウンドや大学中庭などはおもにシバの優占した草地となっているが、チガヤやスズメノヒエ、ギョウギシバ、アキメヒシバ、オヒシバなどのイネ科雑草、シロツメクサやコメツブツメクサ、タンポポ属、チチコグサ属、スマレ属などの広葉草本が豊富である。近年、小・中学校などのグラウンドを芝生化しようとする動きがあるが、本学のグラウンドは移転当初から芝地として維持・管理されてきた。このグラウンドは、スズメやムクドリ、ドバト、ハシボソガラス、セキレイ類、ツグミなど、草地棲の野鳥の重要な採餌場となっており、雨天時にはカモ類やケリなどの水鳥類もしばしば飛来する。

調査方法

本報告は岡田山キャンパスに棲息する野鳥について、主として第一著者による1991年以降の不定期の観察、および、著者らによる2003年度から2005年度にかけてのルートセンサス等の調査結果を元にとりまとめた。目録には著者らの記録に加えて、既存資料に記載のある種を加えた。

2003年度および2004年のルートセンサスは、各月下旬に1回、早朝に実施した。2005年度のルートセンサスは、1週間間隔を目安に、各月4-5回、早朝に実施した。ただし、1月上旬、12月下旬、2月はまる一月が欠測となっている。センサスルートは学院の正門下を起点に、音楽学部、デフォレスト館、岡田神社、講堂前、中学・高等学部前、谷門の森、松風庵、エッジウッド館、学生寮北側、グラウンド、理学館北側を經由して大学中庭に至る全長約1.5kmのコースである(図3)。標高は海拔8-50mで、約40mの高度差があり、キャンパス全体の高度範囲をカバーしている。

結果と考察

岡田山キャンパスの鳥類相

岡田山の自然編集委員会編（1974）および神戸女学院環境保全委員会編（1982）の記録、および1991年以降20年以上に亘る各種観察やセンサスの結果、岡田山キャンパスには15目35科93種の野鳥が生息（上空通過および過去の記録を含む）することが明らかになった（表1）。

生息区分では、「留鳥」が約35%を占めている。留鳥には、当キャンパスに周年生息してキャンパス内で繁殖している種（目録の留鳥1）と、キャンパスではほぼ周年みられるが繁殖や採餌の主体が本キャンパス以外の地域にあると考えられる種（留鳥2、留鳥3）とがある。キャンパス内にほぼ周年生息し、毎年、確実に繁殖していると考えられる留鳥には、キジバト、コゲラ、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、メジロ、ムクドリ、スズメがある。同じく留鳥でも、ハシボソガラスは近年営巣が確認できず、ヤマガラも繁殖期に姿を消すことが多い。本キャンパスではほぼ周年みられるが繁殖や採餌の主体がキャンパス外の地域にあると考えられる留鳥には、カワウやサギ類、タカ類、セキレイ属など、水辺や山岳地帯をすみかとする種があげられ、セキレイ属を除いてその大部分は上空通過種である。「夏鳥」は全鳥種の約30%を占めているが、その大部分は岡田山キャンパスよりも北方または高標高域で繁殖し、本学を春と秋の渡りの時期に通過する。このような旅鳥型の夏鳥には、サンショウクイ、ヤブサメ、ムシクイ属、キビタキ、オオルリなどがあり、冬は東南アジア等の熱帯・亜熱帯域で越冬する。本学とその周辺域で繁殖していると考えられる夏鳥はツバメとアオバズクの2種のみであるが、このうちアオバズクについては営巣が確認できていない。「冬鳥」は全鳥種の約13%を占め、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、マヒワ、シメなどがおもなものである。何れも、主として日本以外の北方域で繁殖し、冬季、岡田山キャンパスを含む日本列島で越冬する種である。「漂鳥」は全鳥種の約18%を占め、モズ、ウグイス、ルリビタキ、アオジなどがおもなものである。何れも、北方または山岳地帯で繁殖し、本学には冬を中心とした季節に飛来する

表1. 岡田山キャンパスで確認された野鳥の生息区分とおもな生息環境。

	科数	種数	生息区分					おもな生息環境				
			留鳥	夏鳥	冬鳥	漂鳥	旅鳥	森林・疎林	農耕地・原野	都市・宅地	開放水域	
キジ目	1*	2*	2*						1	1		
カモ目	1	3	1		2							3
ハト目	1	3	2			1			2		1	
カツオドリ目	1	1	1									1
ペリカン目	1	4	4									4
カッコウ目	1	4		4					4			
ヨタカ目	1	1		1					1			
チドリ目	2	3	1	1		1			1	2		
タカ目	2	7	3	2		2			4	2		1
フクロウ目	1	2		1		1			2			
サイチョウ目	1	1						1		1		
ブッポウソウ目	1	1	1									1
キツツキ目	1	2	1			1			2			
ハヤブサ目	1	3	1	1		1				1	2	
スズメ目	19	56	16	16	10	11	3		42	12	2	
合計 (%)	35	93	33(35.5)	26(28.0)	12(12.9)	18(19.4)	4(4.3)		59(63.4)	19(20.4)	5(5.4)	10(10.8)

*1990年以前の記録のみ。

冬鳥型の漂鳥である。なお、ウグイスは近年7月頃までキャンパスに滞在することが多く、キャンパス内で繁殖している可能性がある。また、晩秋から冬にかけての岡田山キャンパスでみられるヒヨドリの大半は、北方域から飛来した漂鳥型の越冬個体群と考えられる。冬鳥と漂鳥を合わせると、全鳥種の3分の1が冬を中心とした季節に岡田山キャンパスを利用していることになる。「旅鳥」は4種が記録されているが、ほぼ毎年みられるのはオオムシクイとマミチャジナイである。

生息環境は主として採餌場所に従って区分を行ったが、森林または疎林、林縁などに生息する野鳥が約6割を占めており、本キャンパスの鳥類相が基本的に森林性の鳥類で構成されていることを示している。ハシブトガラスは都市鳥とされることが多いが、本学での観察では採餌・営巣ともに森林に大きく依存しているため、森林性鳥類とした。農耕地や原野等をおもな生息地とする野鳥は全体の約2割を占めているが、ツバメやムクドリ、セキレイ類を除くと、出現季節も限られており、個体数もごく少ない。都市・住宅地をおもな生息地とする野鳥には、ドバトやスズメの他に、チョウゲンボウ、イソヒヨドリなどが含まれる。後ろの2種は必ずしも都市鳥ではないが、当地域ではマンション等のビルを営巣地としていると考えられる。開放水域をおもな生息地とする野鳥にはカモ類やサギ類、カワウなどがあり、岡田山キャンパスではほとんどが上空通過である。

センサスの結果

2003年度から2005年度にかけて実施したセンサス調査の結果、岡田山キャンパスの野鳥の種数は、夏季は少なく10種程度であるのに対して、秋から春にかけての冬季を中心と季節には15種前後と多くなることが明らかになった(図4)。秋から春にかけては、シロハラやツグミ、ジョウビタキ、シメ、アオジなどの冬鳥や漂鳥が飛来してキャンパスで越冬するのに対して、夏鳥は実質的にはツバメしかいないので、このような結果となったと考えられる。

個体数の推移をみると、夏季に最も少ないのは種数と同様であるが、個体数の方は秋季から初冬にかけて最も多くなる傾向があり、種数の推移とはやや異なっていた。そのおもな理由は、秋季に冬鳥や漂鳥が飛来するとともに、ヒヨドリ等の留鳥も一般的に同時期に個体数が増えるためである。10月から12月にかけての岡田山では、クスノキやムクノキ、ヒメユズリハなどの樹木の液果が豊富に熟すので、ヒヨドリやメジロなどの果実食鳥が北方や山岳地帯から一時的に流入し、図4のような不均衡な個体数分布を示す要因となっている。

留鳥の個体数について岡田山キャンパスでの季節的推移をみると、スズメは4月から7月、ムクドリは6月から8月の主として繁殖期に個体数が多く、一方、ヒヨドリ、キジバト、メジロ、エナガは10月から3月の主として非繁殖期に個体数が多かった。スズメやムクドリは農耕地等の開けた環境をおもな採餌地としているが、5月-6月に森林で大量発生する鱗翅目の幼虫が雛の餌に適しているようであり、繁殖期には営巣場所や採餌場所として森林をよく利用する(沼里 1985)。ムクドリはこうした季節性がとくに明瞭で、岡田山キャンパスでは4月から9月のほとんど繁殖期にしかみられない。一方、ヒヨドリやメジロ等は一年を通して森林を利用しているが、先に述べたように北方からの個体群の流入があるので、秋季から冬季にかけて

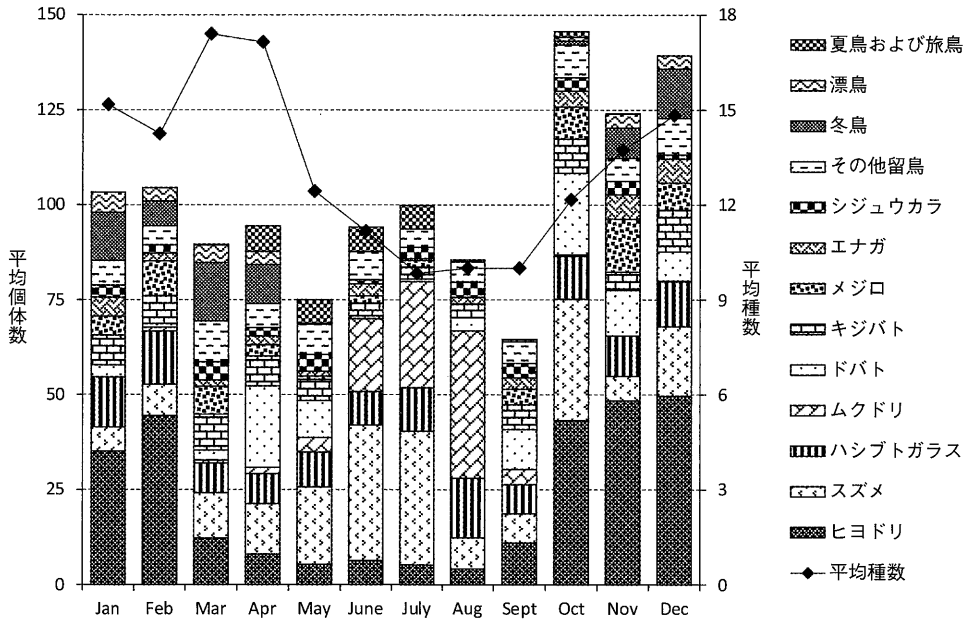


図4. 2003年4月から2006年2月にかけて実施したルートセンサスによる、種別・生息区分別個体数および種数の月別推移。2003年度と2004年は原則として月末に各1回、2005年と2006年はほぼ1週間に1度の間隔でセンサスを実施した（ただし2005年2月は欠測）。平均個体数および種数は、各月の個体数および種数を合計したものを各月の調査回数でそれぞれ割って求めた。

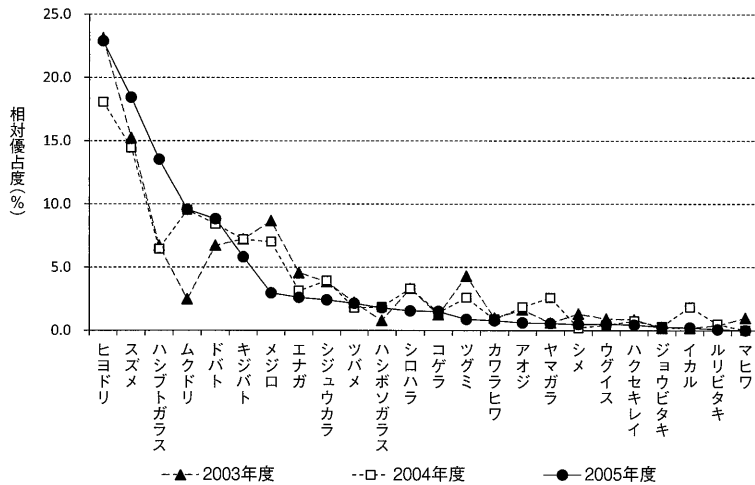


図5. 2003年度～2005年度における年間総個体数による種順位曲線。全ての年度で個体数の多かった上位24種の相対優占度について、調査回数の多い2005年度の順位で示す。

個体数が一時的に多くなるものと考えられる。冬鳥と漂鳥は晩秋から春季にかけて個体数が多く、冬鳥ではシロハラ、ツグミ、シメなどが、漂鳥ではアオジ、ウグイスなどがおもなものである。これらの冬鳥や漂鳥が岡田山キャンパスから最後に姿を消すのは、ちょうどゴールデンウィークの頃である。

種別の総個体数に基づく相対優占度を、年度ごとの種順位曲線の形で図5に示す。年度に

よって種の順位には多少のばらつきがあるが、各年度ともにヒヨドリとスズメの個体数が最も多く、第1位のヒヨドリは総個体数の20%前後を、第2位のスズメは15-20%を占めていた。3位以下は年度によって異なるが、ハシブトガラス、ムクドリ、ドバト、キジバト、メジロ、エナガ、シジュウカラなどの留鳥の個体数が多く、次いで、夏鳥のツバメや冬鳥のシロハラ、ツグミなど季節的に岡田山キャンパスを利用する種が続いていた。ここに示した個体数上位種は最下位のマヒワを除いて、岡田山キャンパスで毎年必ず観察することができる。

50年間の鳥類相の変遷

都市近郊において、十数年あるいは数十年の長期にわたり鳥相の変化を追跡した研究では、鳥類は生息地や越冬地における環境の劣化に敏感であると同時に、一部の種は新しい都市的環境にも比較的速やかに順応することが報告されている（内田ほか 2003；桜谷ほか 2008；片山ほか 2012）。岡田山キャンパスの鳥類相については、残念ながら定量的なデータの蓄積はないが、過去の日録と現在の鳥類相とを比較することで、約半世紀における鳥類相の変化をある程度追跡することができる。

岡田山の鳥類相については、「岡田山の自然」（岡田山の自然編集委員会編 1974）に43種、その増補改訂版（神戸女学院環境保全委員会編 1982）に8種が追加され、1980年代の初頭までに計51種が記録されている（表2）。それらの野鳥で、現在（1990年代以降）の岡田山にみられないのはキジ科のキジとコジュケイのみである。「岡田山の自然」の野鳥の項を担当した前多氏によると、この両種は1980年頃までに岡田山キャンパスから姿を消したようである。また、ホオジロは1970年代前半にはキャンパスの各所で繁殖していたようであるが（岡田山の自然編集委員会編 1974）、1990年代以降は冬季ごく稀に漂行記録があるのみで、実質的に岡田山キャンパスから姿を消している。モズは「岡田山の自然」には「あちらこちらでよく見られ」という記述があるが、最近では毎冬1-2個体がみられるのみである。キセキレイも「岡田山の自然」には「よく姿をみかける」とあり、巣材の枯れ草を集めている様子が記されているが、1990年代以降は年に数回観察される程度である。以上の5種は、雑木林に草地、田畑などが組合わさった里山的環境をおもな生息地としているが、1960年代後半から1970年代にかけての都市化の進行に伴い、岡田山キャンパスの周辺からこうした環境が失われていったことが局地的な絶滅や減少のおもな要因であると考えられる。実際に、1960年代後半から1970年代前半にかけて、岡田山キャンパスの西側の水田や田畑が埋め立てられて市営住宅や分譲住宅に変わり、また、キャンパス内でも西側地区を中心に数棟の建物が建てられて、一帯の環境は一変したと推測される。農地や里山的環境を好む野鳥が、高度成長期に続く1970年代から1980年代の都市近郊域において減少あるいは地域的に絶滅する現象は、東京都（内田ほか 2003；植田ほか 2004）などからも報告されている。

1990年代の前半まで岡田山で観察され、それ以降の記録がない種には、ヤマシギ、カケス、キクイタダキ、コルリ、ミヤマホオジロがある（表2）。カケスを除くと何れの種も近畿地方や兵庫県といった地方レベルで越冬個体群や通過個体群の減少が報告されているので（江崎・和田編 2002；兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課 2013）、岡田山キャンパスにおける減

表 2. 既存目録と記録鳥種。

目録出典	初めて記録された鳥種	種数
岡田山の自然編集委員会編 (1974)	コジュケイ*、キジバト、アオバト、ホトトギス、ツツドリ、カッコウ、ヨタカ、トビ、アオバズク、モズ、カケス**、ハシボソガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、コシアカツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メボソムシクイ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、メジロ、ヒレンジャク、トラツグミ、シロハラ、アカハラ、ツグミ、コルリ**、ルリビタキ、ジョウビタキ、ノビタキ、オオルリ、スズメ、キセキレイ、ビンズイ、アトリ、カワラヒワ、シメ、イカル、ホオジロ、ミヤマホオジロ**、アオジ	43種
神戸女学院環境保全委員会編 (1982)	キジ*、ゴイサギ、コサギ、フクロウ、コゲラ、ムクドリ、クロツグミ、キビタキ	8種
野寄 (2010)	カルガモ、コガモ、ドバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、ジュウイチ、ケリ、コチドリ、ヤマシギ**、ミサゴ、ハチクマ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノスリ、ヤツガシラ、カワセミ、アオゲラ、ハヤブサ、サンショウクイ、サンコウチョウ、ハシブトガラス、キタイタダキ**、ヒガラ、ヤブサメ、キレンジャク、マミチャジナイ、コマドリ、エゾビタキ、コサメビタキ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、マヒワ、カシラダカ、クロジ	36種
本報告	ヒドリガモ、チョウゲンボウ、チゴハヤブサ、オオムシクイ、イソヒヨドリ、サメビタキ	6種
合計		93種

*1990年代以降の観察記録がない種。 **1990年代前半まで観察記録がある種。

少傾向もこれらと軌を一つにしている可能性がある。

一方、上記の既存目録に記録が無く、1990年代以降になって岡田山での生息が確認された種は、カルガモ、カワウ、アオサギ、ミサゴ、オオタカ、サシバ、アオゲラ、チョウゲンボウ、サンショウクイ、サンコウチョウ、ハシブトガラス、ヤブサメ、マミチャジナイ、イソヒヨドリ、コサメビタキ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、マヒワなど、計42種に上る（表2）。これらの種の大半は、1980年代以前にも岡田山キャンパスに生息または飛来（上空通過が多い）していたが、調査や識別の精度の関係で記録されていなかった可能性が高い。「岡田山の自然」がまとめられた当時は、野鳥の観察を趣味とする職員によるおもに肉眼での観察（キャンパスに隣接する宅地の餌台での観察を含む）が行われており、双眼鏡やフィールドスコープを用いた観察はほとんど行われていない（前多氏私信）。したがって、上空を通過する猛禽類や囀りの不明瞭な一部の小鳥類は十分に記録されていなかったと思われる。このような点を考慮すると、岡田山の鳥類相はこの約50年間にそれほど大きく変化していない可能性があるが、カルガモ、カワウ、オオタカ、コゲラ、ハシブトガラス、ハクセキレイ等については、20世紀の終わり頃に都市部での顕著な増加が報告されているので（石田ほか 2000；植田ほか 2004；中村 2013など）、岡田山キャンパスでも1980年代以降に新たにみられるようになった可能性がある。例えば、ハクセキレイは20世紀後半に国内各所で分布域の拡大が報告されており、兵庫県でも1980年代後半から夏季にも生息するようになり、1995年以降急速に生息範囲を広げたとされている（中村 2013）。一方、セグロセキレイは1980年代以前の岡田山キャンパスに生息していた

か否かは不明であるが、1990年代初頭にはごく普通にみられ、囀りなどの様子からキャンパス内で繁殖していたと考えられる。同様にハシブトガラスは、1990年代以降の岡田山キャンパスでは優占種の一つであり、既存目録がまとめられた1980年代初頭までのキャンパスに全く生息していなかったとは考えにくい。一般に、ハシボソガラスは農村部、ハシブトガラスは山地の森林域もしくは都市部に多いとされ、都市化の進行に伴いハシボソガラスからハシブトガラスに交代することが報告されている（日本野鳥の会編 2001）。ハシブトガラスが東京や大阪などの大都市圏に進出し始めたのはおもに第二次世界大戦後であり、とくに1980年代後半からの増加が顕著であるといわれている（日本野鳥の会編 2001）。1970年代までの岡田山キャンパスとその周辺域に農村的な環境が残っていたとすると、「岡田山の自然」がまとめられた当時は、キャンパス内においてハシボソガラスが優勢であった可能性が高く、同書にはその営巣行動や親子の様子なども記述されている。これらのことから、岡田山キャンパスにおいてハシブトガラスが顕著に増加したのは1980年代頃のことであり、1990年代には優占種となり、2000年頃からは岡田山の一部の森林（南山や谷門の森など）がハシブトガラスの塒となって現在に至っていると考えられる。

1990年代以降に岡田山キャンパスとその周辺に定着したと考えられる野鳥には、イソヒヨドリとチョウゲンボウがある（表2）。イソヒヨドリは1990年代の後半から付近のマンションで繁殖し始め、2010年にはキャンパス内でも観察された。チョウゲンボウは2013年になってキャンパスの周辺で姿を見かけるようになった。何れも、ビルや橋桁などの人工構造物に営巣することで、近年、都市部にも進出している種である。

大学キャンパスの鳥類相

日本各地の大学キャンパスの鳥類相について表3にとりまとめた。各大学キャンパスの規模や立地、都市化の程度、環境、さらには調査方法、調査期間等にはかなりのばらつきがあり単純な比較はできないが、ここでは大学キャンパスの鳥類相を概観した上で、岡田山キャンパスの鳥類相の特徴を検討してみたい。なお、既存資料が得られたのは当大学を含む20キャンパスで、北緯34° 65'（近畿大学東大阪キャンパス）から北緯37° 68'（福島大学）、全て本州に位置し、気候帯も全て暖温帯に属している。面積は7.2-113.0ha（平均30.0ha）の範囲にあった。

計20の大学キャンパスでは、累計すると約190種の野鳥が記録されており、キャンパス別の種数の最多は多摩丘陵にある玉川学園の139種であった。野鳥の種数が100種を超える大学キャンパスは5つあったが（玉川学園、鳥取大学、上越教育大学、近畿大学奈良 C、東京農工大学府中 C）、それらは何れも面積が広い（25ha以上）上に、庭園や植栽樹群、グラウンドなど大学キャンパスに必須の環境に加えて、森林や圃場、池など、野鳥の生息地となる多様な環境（周辺域を含む）を備えている点に特徴があった。種数はやや少ないが、福島大学についてもほぼ同様のことがいえる。また、上越教育大学と鳥取大学では、かすみ網を用いた捕獲調査（標識調査）を行っている点も種数が多い一因となっている。なお、種数が最多の玉川学園のデータには、多摩丘陵の開発が始まる前の1960年代のデータが含まれているが、多摩丘陵および学園が現在とほぼ同じ姿となった1980年代以降に限ると、野鳥の種数はほぼ半減する。これ

表3. 大学キャンパスの野鳥の種数。

大学キャンパス	調査方法	調査年数 (期間)	面積 (ha)	分類群数		構内環境(建物を除く)						周辺環境		地形	
												都市化 の程度*	樹林との距離** (km)		
				科	種	グラウンド	庭園	植栽樹群	圃場	森林	池	>1ha	>100ha		
神戸女学院大学	ルートセンサス, 随時観察	23 (1991-2013) ***	14.0	34***	91***	+	+	+				5	1.00	1.00	洪積台地
1. 東京家政大学	随時観察	12 (1990-2001)	7.2	21	29	+	+	+				5	0.25	7.00	洪積台地
2. 兵庫女子短期大学	随時観察	不明 (1986以前)	8.4	18	23	+	+	+		+	+	3	1.80	5.20	洪積台地
3. 東邦大学習志野 C.	随時観察	6 (1983-1989)	8.6	24	44	+	+	+				4	0.53	4.25	洪積台地
4. 自由学園	定期観察	35 (1964-1998)	10.0	30	61	+	+	+	+	+		4	0.73	8.87	洪積台地
5. 茨城大学阿見 C.	ルートセンサス, 随時観察	2 (1988-1990)	11.5	19	34	+	+	+	+			3	0.72	5.90	洪積台地
6. 東京農業大学世田谷 C.	ルートセンサス, 定点観察	1.3 (2008-2009)	12.8	20	26	+		+				5	0.15	5.60	洪積台地
7. 奈良教育大学	随時観察, ルートセンサス	3 (1988-1990, 1993-1994)	14.0	21	40	+	+	+				3	0.20	0.20	扇状地
8. 千葉大学松戸 C.	ルートセンサス, 随時観察	2 (2001-2002, 2003-2004)	15.0	24	46	+	+	+	+	+		4	0.08	15.30	洪積台地
9. 相模女子大学	ルートセンサス	3 (1978-1981)	17.3	18	36	+	+	+				4	0.50	1.00	洪積台地
10. 名古屋聖霊学園	随時観察	11 (1989-1999)	24.0	27	54	+	+			+		2	0.00	0.00	丘陵
11. 近畿大学東大阪 C.	定点観察, ルートセンサス	2 (1983-1984)	24.1	20	28	+	+	+				5	2.00	4.75	沖積低地
12. 東京農工大学府中 C.	ルートセンサス, 随時観察	17 (1963-79)	25.0	37	103	+		+	+	+		4	0.53	3.82	洪積台地
13. 上越教育大学	ルートセンサス, 捕獲	7 (1992-1997, 2006-2007)	36.0	40	105	+	+	+		+	+	2	0.00	0.00	丘陵
14. 福島大学	随時観察	28 (1981-2008)	43.3	39	89	+	+	+		+	+	1	0.00	0.00	丘陵
15. 横浜国立大学	随時観察	数年間 (1989年以前)	45.5	21	35	+	+	+		+		4	0.10	5.00	丘陵
16. 東海大学湘南 C.	ルートセンサス, 自動カメラ	2 (2005-2007)	51.0	25	47	+	+	+				3	0.25	1.25	洪積台地
17. 鳥取大学	ルートセンサス, 捕獲, 随時観察	3.5 (2006-2010)	51.0	42	122	+	+	+	+	+	+	3	0.15	1.05	洪積台地
18. 玉川学園	ルートセンサス, 随時観察	30 (1963-1992)	56.0	44	139	+	+	+	+	+	+	4	0.00	0.95	丘陵
19. 近畿大学奈良 C.	定期観察	15 (1995-2010)	113.0	37	105	+	+	+	+	+	+	2	0.00	0.00	丘陵

所在地 (出典): 1. 東京都板橋区加賀 (浅川ほか 2003), 2. 兵庫県加古川市平岡町 (山田・高見 1986), 3. 千葉県船橋市三山 (東邦大学野鳥の会 1989), 4. 東京都東久留米市学園町 (内田ほか 2003), 5. 茨城県稲敷郡阿見町 (堤・松沢 1990a,b), 6. 東京都世田谷区桜丘 (竹内ほか 2010), 7. 奈良県奈良市高畑町 (井上 1990; 川西 1996), 8. 千葉県松戸市松戸 (佐藤ほか 2003; 茂木ほか 2004), 9. 神奈川県相模原市南区 (河崎ほか 1981), 10. 愛知県瀬戸市せいれい町 (申 2004), 11. 大阪府東大阪市小若江 (犬塚・大石 1985), 12. 東京都府中市幸町 (東京農工大学野鳥研究会編 1980), 13. 新潟県上越市山屋敷町 (生稲・中村 2010), 14. 福島県福島市金谷川 (黒沢ほか 2010), 15. 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 (原田ほか 1998), 16. 神奈川県平塚市北金目 (佐藤ほか 2007), 17. 鳥取県鳥取市湖山町 (村田ほか 2011), 18. 東京都町田市玉川学園・神奈川県横浜市青葉区奈良町・川崎市麻生区岡上 (箕輪ほか 1993), 19. 奈良県奈良市中町 (片山ほか 2012).

*キャンパスの周囲 1 km の範囲内における宅地および市街地の割合 (%) を 5 段階で評価した。1 : <20%, 2 : 20-40%, 3 : 40-60%, 4 : 60-80%, 5 : >80%。

**最も近い山林または樹木の多い緑地との距離。0 はキャンパスと樹林とが接していることを示す。

***本学の調査年数は第一著者の着任後の 23 年間とし、科数および種数も 1991 年以降に記録のある 34 科 91 種とした。

らのことから、十分な面積と多様な立地環境を備えた大学キャンパスの野鳥の種数は、数年程度の観察に基づくと100種程度に及ぶものと考えられる。

ほぼ全ての大学キャンパスでみられた野鳥（出現率90%以上）は、キジバト、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ツグミ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの17種であった。都市の公園でもみられる種が多いが、ウグイスやアオジなど下生えを伴う樹林を必要とする種を含む点が注目される。このような常在種のみを取り上げても、留鳥や漂鳥、夏鳥、冬鳥など多様な生息区分の野鳥が含まれており、大学キャンパスは総じて野鳥の生態を学習するのに適した鳥類相と環境を備えているといえる。半数以上のキャンパスでみられた野鳥に範囲を広げると、サギ類、カルガモ、トビ、フクロウ、コゲラ、ヒバリ、セキレイ類、シロハラ、ルリビタキ、キビタキ、エナガ、ヤマガラ、ホオジロ、イカル、オナガなどが加わり、水辺や草原、まとまった森林を必要とする種、猛禽類など生息環境や栄養段階も一段と多様になる。

神戸女学院岡田山キャンパスの野鳥の種数は、ほぼ同じ規模（10-20ha）の大学キャンパスの種数が30-60種程度であるのに対して、約90種とかなり多い値を示している（表3）。都市化の程度が著しい上に、樹林の孤立化の程度（近接する樹林との距離等）も他大学とあまり変わらないので、岡田山キャンパスの野鳥の種数は他大学に較べても多いといえる。本学のデータは他大学より調査期間がかなり長い、岡田山キャンパスで1年間に観察できる野鳥の種数は2003年度および2005年度ともにほぼ50種であり、2003年度からの3年間の累計では61種であった。都市部に位置すること、構内や周辺域に大きな池や川がないこと等を考慮すると、岡田山キャンパスにはやはり多くの野鳥が集まっているといえる。本学で記録があるが、大学キャンパス全体では出現率20%以下の稀な種には、ミサゴ、チゴハヤブサ、ケリ、アオバト、ジュウイチ、ヤツガシラ、キレンジャク、ヒレンジャク、コマドリなどがある。猛禽類や旅鳥、漂鳥など多様な鳥が岡田山キャンパスとその上空を利用していることを示しているが、これは、岡田山キャンパスの地理的位置が明石海峡や六甲山など、野鳥の渡りのコースに近いこと、都市の中に浮かぶ緑の島のような環境が野鳥を引きつけていることが関係していると考えられる。

各 論

目録解説

鳥類目録は、和名および学名、英名、岡田山および周辺地域における生息状況、生息数区分、おもな観察記録、岡田山キャンパスにおける生息環境、既存資料での記録、レッドリスト区分、解説の順に記載し、分類群の配列や種名、学名等は日本鳥学会編（2012）に則った。学名は亜種が区分されている場合は亜種名で表記したが、亜種名が不明確なものについては種名で表記した。

岡田山および周辺地域における生息状況については、以下のような方針で区分し、国内外での生息状況については高野（2007）、日本鳥学会編（2012）を参考にした。留鳥1：岡田山キャンパスに通年生息し、定常的に繁殖していると考えられる種。営巣を複数回確認したか、巣立ち直後と思われる幼鳥がほぼ毎年確認されている。留鳥2：岡田山キャンパスで繁殖期に観察

されるが、岡田山の近隣地区で繁殖していると考えられる種。岡田山では営巣や巣立ち直後の幼鳥が観察されず、生息数も年度ごとに変動することが多い。留鳥3：岡田山キャンパスではほぼ通年または不定期に観察されるが、生息地や繁殖地の主体が岡田山以外の地域にあると考えられる種。この区分にはカワウやサギ類、ワシ・タカ類などの上空通過種および、現在の岡田山から姿を消した留鳥類が含まれる。夏鳥1：岡田山キャンパスとその近隣地区に夏期飛来して繁殖し、冬季はおもに東南アジア等の熱帯域で越冬する種。夏鳥2：岡田山キャンパスとその近隣地区以外の日本列島で繁殖し、冬季は東南アジア等の熱帯域で越冬する種。岡田山キャンパスを春・秋に通過する。冬鳥：おもに日本列島以外の地域で繁殖し、冬季岡田山キャンパスで越冬する種。漂鳥：岡田山キャンパス以外の日本列島で繁殖し、冬季岡田山キャンパスで越冬する種。旅鳥：日本列島以外の地域で繁殖し、冬季は東南アジア等の熱帯域で越冬する種。おもに春・秋に日本列島および岡田山キャンパスを通過する。

生息数については、次のような基準で区分した。D：通年みられ個体数の多い種、C：ほぼ通年みられるが個体数の少ない種、S：毎年、特定の季節に普通にみられ個体数の多い種、R：ほぼ毎年、不定期または特定の季節にみられるが個体数の少ない種、O：稀にみられる種（2-3年間隔）、A：ごく稀にみられる種（5-10年間隔）、P：過去に記録があるが現在（1991年以降）の岡田山ではみられない種。

観察記録は観察数の少ない種に絞って記載したが、全ての観察記録が網羅できているわけではない。記録年月日の後の数値は観察個体数で、雌雄または成・幼鳥の別が判明している場合は各々雌（f）、雄（m）、幼鳥（im.）の略号を付した。また、鳴声から種を識別した観察記録には鳴き声（v）を記した。

岡田山キャンパスにおける生息環境については、「森林」「林縁」「庭園」「グラウンド」「建物」に区分し、上空を飛翔する種は「上空通過」とした。近隣地域の地名および構内の場所等については図1および図3を参照されたい。「清思庵」は現在の「ジュリア・ダッドレー記念館」の場所にあった建物である。既存資料に記録のある種については、初出の資料を略号（下記参照）で記した。目録名がないものは、本研究で新たに報告された新産種である。なお、既存資料と本研究とで生息区分が異なる種については、既存資料の生息区分を括弧書きで示した。

レッドリスト区分は該当種のみに記載し、日本：環境省生物多様性情報システム絶滅危惧種情報（http://www.biodic.go.jp/rdb/rl2012/redList2012_tyorui.csv, 27 Aug, 2013参照）、近畿地方：江崎・和田編（2002）、兵庫県：兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課編（2013）の各レッドリストにおける評価を略号で記した。評価のランクは、日本（環境省）ではVU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、近畿ではVU：絶滅危惧種、NT：準絶滅危惧種、PA：要注目種、兵庫ではA、B、Cの3ランクとPA：要注目種、DD：要調査種である。なお、近畿地方と兵庫県では各野鳥を、繁殖個体群(B)、越冬個体群(W)、通過個体群(P)に分けて評価しているので、岡田山キャンパスとその周辺域における棲息状況がこれらに該当する場合にのみ評価ランクを記載し、個体群の類別をランクの後に括弧で記した。例えば、繁殖個体群が準絶滅危惧種の場合の表記は“NT(B)”となる。また、外来種については原産地を付記した。

種の解説は、岡田山における生息状態の記述を中心とし、必要に応じて国内外での分布およ

び一般生息環境なども付記した。出現数や生息区分については、とくに断りがない場合は、最近の約20年間について記述している。

既存資料

- 目録1：岡田山の自然編集委員会編. 1974. 岡田山の生物目録. 「岡田山の自然, 六甲山東麓の生物とその生態」, 89-130. 神戸女学院百周年記念岡田山の自然出版委員会, 西宮.
- 目録2：神戸女学院環境保全委員会編. 1982. 岡田山の野鳥. 「増補改訂岡田山の自然」, 194-195. 神戸女学院, 西宮.
- 目録3：野寄玲児. 2010. 神戸女学院岡田山キャンパス自然環境学術調査報告書. 45pp. 神戸女学院, 西宮.

岡田山産鳥類目録

AVES 鳥綱

GALLIFORMES キジ目

1. Phasianidae キジ科

1. *Bambusicola thoracicus thoracicus* (Temminck) コジユケイ (Chinese Bamboo Partridge)

留鳥 3 P 森林 目録1 外来 (中国、台湾)

目録1に記録があるが、「声も今では全く聞けなくなり」とあるので (岡田山の自然編集委員会編 1974)、岡田山からは1970年代前半には姿を消したものと考えられる。岡田山の北西約1kmの西宮市山田町および甲山周辺には現在も生息している。

2. *Phasianus colchicus* Linnaeus キジ (Common Pheasant)

留鳥 3 P 林縁 目録2

西門車道が整備 (1982年頃) されるまでは、岡田山の西側斜面の森に生息していたようである (前多氏私信)。西宮市山田町付近にはごく最近まで生息していたが、土地開発で生息地の棚田が消滅した。

ANSERIFORMES カモ目

2. Anatidae カモ科

3. *Anas penelope* Linnaeus ヒドリガモ (Eurasian Wigeon)

冬鳥 R 19 Nov. 2011; 21 Nov. 2012 (m. 3, f. 4); 19 Dec. 2012 (m. 6, f. 7); 8 Jan. 2014 (m. 12, f. 7) グラウンド

2011年-2013年の冬 (11月-1月頃)、夜間のグラウンドに十数羽の群で飛来し、シロツメクサ等を採食していた。

4. *Anas zonorhyncha* Swinhoe カルガモ (Eastern Spot-billed Duck)

留鳥 3 R 13 May 2006 (2); 12 Apr. 2010 (2); 7 May 2010 (2) 上空通過・グラウンド
目録 3

番いでしばしば上空を通過し、稀に雨で冠水したグラウンドに飛来する。近辺では、津門川
に周年少数個体がみられるが、繁殖地は武庫川周辺および伊丹市昆陽池付近と思われる。

5. *Anas crecca crecca* Linnaeus コガモ (Teal)

冬鳥 O 10 Apr. 2006 (m. 2, f. 3); 22 Apr. 2010 (m. 1, f. 1) グラウンド 目録 3

冬から春にかけて、雨で冠水したグラウンドに数羽の群れでごく稀に飛来する。

COLUMBIFORMES ハト目

3. Columbidae ハト科

6. *Columba livia* Gmelin カワラバト (ドバト) (Rock Dove)

留鳥 1 D グラウンド・庭園・建物 目録 3 外来 (欧亜大陸)

グラウンド等に数羽から数十羽の群でごく普通にみられる。

7. *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham) キジバト (Oriental Turtle Dove)

留鳥 1 D 森林・林縁・庭園 目録 1

林内や林縁に普通に棲息する。構内の庭木や林内での営巣も確認されている。

8. *Treron sieboldii sieboldii* (Temminck) アオバト (Japanese Green Pigeon)

漂鳥 R 森林・林縁 目録 1

冬から春の渡りの季節に少数個体または群で飛来する。

SULIFORMES カツオドリ目

4. Phalacrocoracidae ウ科

9. *Phalacrocorax carbo hanedae* Kuroda カワウ (Great Cormorant)

留鳥 3 C 上空通過 目録 3

上空を1羽または数羽の群でよく通過する。近辺では、西宮市高座町新池および伊丹市昆
陽池に繁殖地がある。

PELECANIFORMES ペリカン目

5. Ardeidae サギ科

10. *Nycticorax nycticorax nycticorax* (Linnaeus) ゴイサギ (Black-crowned Night Heron)

留鳥 3 C 上空通過・森林 目録 2

稀に万葉池に現れ、しばらく滞在することがある。夜間に鳴きながら上空を飛翔する個体
もよく観察される。近辺では、西宮市高座町新池に繁殖地がある。

11. *Ardea cinerea juyi* Clark アオサギ (Grey Heron)
 留鳥 3 R 上空通過 目録 3
 やや稀に単独で上空を通過するが、大学中庭の噴水池に飛来して金魚を採食したこともある (June 1991)。近辺では、西宮市高座町新池および伊丹市昆陽池に繁殖地がある。
12. *Ardea alba* Linnaeus ダイサギ (Great Egret)
 留鳥 3 R 上空通過 目録 3
 上空を 1 羽または数羽の群で通過する。近辺では、伊丹市昆陽池に繁殖地がある。
13. *Egretta garzetta garzetta* (Linnaeus) コサギ (Little Egret)
 留鳥 3 C 上空通過 目録 2
 上空を 1 羽または数羽の群で通過する。近辺では、津門川に周年少数個体がみられるが、繁殖地は武庫川周辺および伊丹市昆陽池付近と思われる。

CUCULIFORMES カッコウ目

6. Cuculidae カッコウ科

14. *Hierococcyx hyperythrus* Gould ジュウイチ (Rufous Hawk-Cuckoo)
 夏鳥 2 O June 1991 (v); 5 May 2008 (v); 13 May 2010 (v) 森林 目録 3
 春の渡りの時期に、ごく稀に鳴き声を聴く。
15. *Cuculus poliocephalus* Latham ホトトギス (Lesser Cuckoo)
 夏鳥 2 R 森林・上空通過 目録 1
 春の渡りの時期にほぼ毎年鳴き声を聴く。カッコウ属では最もよく鳴き声を耳にする。
16. *Cuculus optatus* Gould ツツドリ (Oriental Cuckoo)
 夏鳥 2 O May 1995 (v); 14 May 2006 (v) 森林 目録 1
 春の渡りの時期に、ごく稀に鳴き声を聴く。
17. *Cuculus canorus telephonus* Heine カッコウ (Common Cuckoo)
 夏鳥 2 R 森林 目録 1
 春の渡りの時期に、稀に鳴き声を聴く。

CAPRIMULGIFORMES ヨタカ目

7. Caprimulgidae ヨタカ科

18. *Caprimulgus indicus jotaka* Temminck & Schlegel ヨタカ (Jungle Nightjar)
 夏鳥 2 A 14 May 2006 (v); 20 May 2011 (1) 森林・庭園 目録 1 環境省：NT, 兵庫：B (P)
 春の渡りの時期に、ごく稀に鳴き声または目撃記録がある。

CHARADRIIFORMES チドリ目

8. Charadriidae チドリ科

19. *Vanellus cinereus* (Blyth) ケリ (Grey-headed Lapwing)
留鳥 3 O 21 Jan. 2006 (1); Dec. 2007 (1); 8 Jan. 2014 (1) グラウンド・上空通過
目録 3 環境省：DD
ごく稀に上空を通過し、また、夜間や雨天時のグラウンドに降り立っているのがしばしば観察されている。西宮市東部の段上地区では少数個体が生息している。
20. *Charadrius dubius curonicus* Gmelin コチドリ (Little Ringed Plover)
夏鳥 2 A 30 Apr. 2009 (2) グラウンド 目録 3
グラウンドに飛来記録がある (松原始氏確認)。

9. Scolopacidae シギ科

21. *Scolopax rusticola* Linnaeus ヤマシギ (Eurasian Woodcock)
漂鳥 A Dec. 1992-Jan. 1993 (1) 森林 (東山、清思庵) 目録 3 近畿：Nt (W), 兵庫：B (W)
冬鳥としてごく稀に渡来し、林内で越冬する。

ACCIPITRIFORMES タカ目

10. Pandionidae ミサゴ科

22. *Pandion haliaetus haliaetus* (Linnaeus) ミサゴ (Western Osprey)
留鳥 3 C 上空通過 目録 3 環境省：NT, 近畿：VU (B), 兵庫：A (B)
甲山と臨海部 (武庫川河口、西宮市甲子園浜など) を往復する複数個体があり、ほぼ毎日岡田山上空を通過する。

11. Accipitridae タカ科

23. *Pernis ptilorhynchus orientalis* Taczanowski ハチクマ (Honey Buzzard)
夏鳥 2 O 29 Sept. 2005 (1) 上空通過 目録 3 環境省：NT, 兵庫：B (P)
北西約 2.5km の甲山付近が渡りのコースになっており、毎年数百羽が観察されている (<http://bcaweb.bai.ne.jp/sashiba/taka/kasaha.htm>, 2 Sept, 2013参照)。岡田山でも稀に上空を通過する。
24. *Milvus migrans lineatus* (Gray) トビ (Black Kite)
留鳥 3 R 上空通過 目録 1
しばしば上空を飛翔する。猛禽類では、ミサゴ、オオタカに次いでよく観察される。

25. *Accipiter nisus nisosimilis* (Tickell) ハイタカ (Eurasian Sparrowhawk)
 漂鳥 O Nov. 1992 (m. 1); 13 Apr. 2006 (f. 1, 松原始氏); 9 Dec. 2009 (f. 1); 30 Oct. 2013 (f. 1) 上空通過・森林 目録3 環境省:NT
 稀に上空を飛翔するが、冬季には林内でも観察されている。
26. *Accipiter gentilis fujiyamae* (Swann & Hartert) オオタカ (Northern Goshawk)
 留鳥 3 R 1 Sept. 2007 (m. 1) 上空通過・森林 目録3 環境省:NT, 近畿:NT (B), 兵庫:B (B)
 甲山周辺を生息地とする個体があり、岡田山上空にもしばしば飛来する。2007年9月には、谷門の森でハシブトガラスを捕食中のオス1羽が観察されている。
27. *Butastur indicus* (Gmelin) サシバ (Grey-faced Buzzard-eagle)
 夏鳥 2 R Sept. 1993 (23) 上空通過 目録3 環境省:VU, 兵庫:C (P)
 北西約2.5kmの甲山付近が渡りのコースになっており、毎年数千羽が観察されている (<http://bcaweb.bai.ne.jp/sashiba/taka/kasaha.htm>, 2 Sept, 2013参照)。岡田山でもやや稀に上空を通過する。
28. *Buteo buteo japonicus* (Temminck & Schlegel) ノスリ (Common Buzzard)
 漂鳥 A Jan. 93 (1) 上空通過 目録3 近畿:NT (W)
 ごく稀に上空を飛翔する。

STRIGIFORMES フクロウ目

12. Strigidae フクロウ科

29. *Strix uralensis* Pallas フクロウ (Ural Owl)
 漂鳥 R 31 Dec. 2002 (1); 30 Oct. 2008 (1); 26 Dec. 2012-5 Mar. 2013 (1); 10 Jan. 2014 (1) 森林・庭園 目録2 近畿:NT (B)
 冬季稀に観察されている。2012年12月から2013年3月にかけて1羽が南山に越冬し、岡田山を囿とするカラスを捕食しているようであった。2014年1月に見つかった屍体(頭と翼、尾羽、脚)をみる限りでは、亜種キュウシュウフクロウ subsp. *fuscescens* Temminck & Schlegel (山階 1941)に近い。
30. *Ninox scutulata japonica* (Temminck & Schlegel) アオバズク (Brown Hawk-Owl)
 夏鳥 1 R 15 July 2005 (v); 20 May 2006 (1); 28 June 2006 (1); 29 May 2010 (1) 森林 目録1 近畿:NT (B), 兵庫:B (B)
 例年5月から7月にかけて、鳴き声または目撃記録があるが、繁殖は確認できていない。

BUCEROTIFORMES サイチョウ目

13. Upupidae ヤツガシラ科

31. *Upupa epops saturata* Lönnerberg ヤツガシラ (Eurasian Hoopoe)

旅鳥 A 7 Apr. 2003 (1) 庭園 目録3 兵庫：DD (P)

2003年4月、ケンウッド館付近から北側の聖和大学方面に飛び去る1羽が観察されている。

CORACIIFORMES ブッポウソウ目

14. Alcedinidae カワセミ科

32. *Alcedo atthis bengalensis* Gmelin カワセミ (Common Kingfisher)

留鳥 3 O 5, 9 June 2007 (1); 24 June 2007 (1) 上空通過・プール 目録3 近畿：NT (B), 兵庫：PA (B)

2007年6月にプールに飛来した1羽が観察されている。当時、このプールは防火用水およびビオトープ池として利用されており、メダカやトンボの幼生などが生息していた（現在は無い）。また、上空を飛翔する個体のごく稀にみられる。

PICIFORMES キツツキ目

15. Picidae キツツキ科

33. *Dendrocopos kizuki* (Kuroda) コゲラ (Japanese Pygmy Woodpecker)

留鳥 1 C 森林・庭園 目録2 (漂鳥)

庭園や林内に普通にみられ、庭園の枯木で営巣する姿がよくみられる。

34. *Picus awokera awokera* Temminck アオゲラ (Japanese Green Woodpecker)

漂鳥 R 10-12 Aug. 2010 (1) 森林 目録3

春の渡りの時期にはほぼ毎年鳴き声や姿が確認されている。2010年8月には夏季の観察例もある。

FALCONIFORMES ハヤブサ目

16. Falconidae ハヤブサ科

35. *Falco tinnunculus interstinctus* McClelland チョウゲンボウ (Common Kestrel)

留鳥 2 R 10 July 2013 (1); 8, 11 Sept. 2013 (1); 14 Oct. 2013 (1); 11 Nov. 2013 (m. 1) 上空通過・グラウンド

2013年7月、理学館上空でイエコウモリを襲う1羽が観察された。それ以降もしばしば岡田山上空を飛翔し、9月には門戸厄神駅西側の高層マンションの上を鳴き交いながら飛翔する2羽が観察されているので、付近で繁殖している可能性が高い。

36. *Falco subbuteo subbuteo* Linnaeus チゴハヤブサ (Eurasian Hobby)
 夏鳥 2 A 17 Oct. 2007 (1); 6 Nov. 2012 (1) 上空通過 兵庫：C (P)
 秋季、ごく稀に上空を飛翔する。
37. *Falco peregrinus japonensis* Gmelin ハヤブサ (Peregrine Falcon)
 漂鳥 O 27 Oct. 2004 (1); 18, 27 Jan. 2005 (1) 上空通過 目録3 環境省：VU, 兵庫：C (W)
 秋から冬に、ごく稀に上空を飛翔する。

PASSERIFORMES スズメ目

17. Campephagidae サンショウクイ科

38. *Pericrocotus divaricatus divaricatus* (Raffles) サンショウクイ (Ashy Minivet)
 夏鳥 2 S 森林・林縁・上空通過 目録3 環境省：VU
 春の渡りの時期に少数の群が毎年観察されている。鳴きながら上空を通過することも多い。

18. Monarchidae カササギヒタキ科

39. *Terpsiphone atrocaudata atrocaudata* (Eyton) サンコウチヨウ (Japanese Paradise Flycatcher)
 夏鳥 2 O June 1999 (v); 11, 23 May 2000 (v); 15 May 2006 (v); 29 May 2007 (v); 11, 23 May 2009 (v); 29 May 2013 (m. 1) 森林 目録3
 5月の中～下旬に、谷門の森で単独個体がしばしば観察されている。

19. Laniidae モズ科

40. *Lanius bucephalus bucephalus* Temminck & Schlegel モズ (Bull-headed Shrike)
 漂鳥 R 林縁 目録1
 キャンパスには9月下旬頃に現れ、3月頃まで滞在するが数は少ない。目録1では「あちらこちらでよく見られ」とあるので、生息数が減少した可能性がある。

20. Corvidae カラス科

41. *Garrulus glandarius japonicus* Temminck & Schlegel カケス (Eurasian Jay)
 漂鳥 O Dec. 1991 (v); Feb. 1992 (v) 森林 目録1 (留鳥)
 目録1に既に減少傾向にあることが記されているが、最近は、声も姿も全く見かけない。甲山付近には通年生息する。

42. *Corvus corone orientalis* Eversmann ハシボソガラス (Carrion Crow)

留鳥 2 C グラウンド・庭園・建物 目録 1

グラウンド等に普通で、最大で30羽程度の群がみられることがあるが、ハシブトガラスと較べると個体数はかなり少ない。2000年頃までは1-2番いが営巣していたが、最近はやがて確認できていない。営巣に適したマツの高木の減少と、近年の岡田山がハシブトガラスの増と化したことが原因と思われる。

43. *Corvus macrorhynchos japonensis* Bonaparte ハシブトガラス (Large-billed Crow)

留鳥 1 D 森林・林縁・庭園・グラウンド・建物 目録 3

現在のごく普通にみられるが、目録 1, 2 には記録がない。2000年頃から岡田山一帯の森は数100羽のカラスの増となっているが、そのほとんどはハシブトガラスである。増は構内の南山と構外の門戸岡田町11丁目の竹林に分散していたが、門戸岡田町の竹林は近年の宅地造成で消滅した。

21. Regulidae キクイタダキ科

44. *Regulus regulus japonensis* Blakiston キクイタダキ (Goldcrest)

漂鳥 O Feb.-Mar. 1992; Nov. 1992; Jan.-Mar. 1993 林縁 目録 3 近畿: NT (W)

1990年代の前半までは冬季に少数個体が観察されていたが、最近は見られない。甲山周辺では冬季やや普通にみられる。

22. Paridae シジュウカラ科

45. *Poecile varius varius* (Temminck & Schlegel) ヤマガラ (Varied Tit)

留鳥 1, 2 C 森林・林縁・庭園 目録 1 (漂鳥)

ほぼ通年みられ、巣立直後の雛鳥がみられる年もあるが、5月から8月の繁殖期に岡田山から姿を消す年も多い。8月の終わり頃にキャンパスに戻ってきて、エゴノキやどんぐりを盛んに集めている。

46. *Periparus ater insularis* (Hellmayr) ヒガラ (Coal Tit)

漂鳥 O 7 Dec. 1996 (1); 19 Nov. 2012-Jan. 2013 (3) 森林・庭園 目録 3

冬季稀に観察される。甲山周辺では冬季やや普通にみられる。

47. *Parus minor minor* Temminck & Schlegel シジュウカラ (Japanese Tit)

留鳥 1 D 森林・林縁・庭園 目録 1 (漂鳥)

一年を通して普通にみられ、各所で営巣も確認されている。

23. Hirundinidae ツバメ科

48. *Hirundo rustica gutturalis* Scopoli ツバメ (Barn Swallow)

夏鳥 1 S 上空通過・グラウンド・庭園 目録 1

3月の下旬から9月にかけてキャンパス内でごく普通にみられる。昔は第1体育館の軒下に営巣していたようであるが(前多氏私信)、構内での繁殖は1990年代以降確認されていない。キャンパスの周辺の民家やマンションでは現在も毎年繁殖し、巣立ち後は集団でキャンパス内に移動して親が給餌する姿がみられる。

49. *Hirundo daurica japonica* Temminck & Schlegel コシアカツバメ (Red-rumped Swallow)

夏鳥 2 R 13 Sept. 2005 (3); 10 July 2012 (1) グラウンド・上空通過 目録 1

1990年代までは、夏季、少数個体がグラウンド等で観察されていたが、最近ではほとんどみられなくなった。昔は第1体育館の軒下で営巣したこともあった(前多氏私信)。現在でも、秋の渡りの時期にはほぼ毎年みられ、甲山周辺ではやや普通にみられる。

24. Pycnonotidae ヒヨドリ科

50. *Hypsipetes amaurotis amaurotis* (Temminck) ヒヨドリ (Brown-eared Bulbul)

留鳥 1・漂鳥 D 森林・林縁・庭園 目録 1

林内にごく普通で、繁殖も確認されている。漂鳥個体群の流入によって、10月から12月にかけては個体数が倍増する。春には数百羽の群が通過することがある。

25. Cettidae ウグイス科

51. *Cettia diphone cantans* (Temminck & Schlegel) ウグイス (Japanese Bush Warbler)

漂鳥 S 25 June 2012 (v); 17, 31 July 2012 (v), 9 July 2013 (v) 森林・庭園 目録 1

従来、岡田山では冬季にみられ、春の訪れ(4月-5月)とともに渡去していた。しかし、ここ数年は7月下旬までさえずりを聞くことが多いので、繁殖の可能性はある。

52. *Urosphena squameiceps* (Swinhoe) ヤブサメ (Asian Stubtail)

夏鳥 2 R 18 Oct. 2005 (1); 10 Oct. 2012 (落鳥 1) 森林 目録 3

春の渡りの時期(4月-5月上旬)にはほぼ毎年さえずりが聴かれ、秋の渡りの時期にも稀に観察されている。

26. Aegithalidae エナガ科

53. *Aegithalos caudatus trivirgatus* (Temminck & Schlegel) エナガ (Long-tailed Tit)

留鳥 1 D 森林・林縁・庭園 目録 1 (漂鳥)

一年を通して普通にみられ、営巣も確認されている。6月頃には20羽以上の群が見られることがある。

27. Phylloscopidae ムシクイ科

54. *Phylloscopus examinandus* Stresemann オオムシクイ (Kamchatka Leaf Warbler)
旅鳥 S May-June 1991; May 1996; 30 May 1999; 6 June 2000; 2 June 2008; 24, 31 May 2009; 2 June 2009; 31 May 2011; 18, 29 May 2012 (v), 5 June 2012 森林・庭園
メボソムシクイよりもひと月ほど遅い時期（5月中旬-6月上旬）に定期的に飛来し、個体数も比較的多い。鳴き声などから齋藤ほか（2012）の本種に相当すると考えられる。
55. *Phylloscopus xanthodryas* (Swinhoe) メボソムシクイ (Japanese Leaf Warbler)
夏鳥 2 O May 1992 (v); Apr. 1994 (v); 2 May 2013 (v) 森林 目録1
春の渡りの時期（4月-5月上旬）に稀に観察されている。
56. *Phylloscopus borealoides* Portenko エゾムシクイ (Sakhalin Leaf Warbler)
夏鳥 2 R 森林 目録1
春の渡りの時期（4月-5月上旬）に毎年観察されているが、秋季の観察例はない。
57. *Phylloscopus coronatus* (Temminck & Schlegel) センダイムシクイ (Eastern Crowned Leaf Warbler)
夏鳥 2 S 30 Sept. 2004 (1) 森林・林縁 目録1
春の渡りの際に毎年観察されている。秋季の確認例はごく少ない。

28. Zosteropidae メジロ科

58. *Zosterops japonicus japonicus* Temminck & Schlegel メジロ (Japanese White-eye)
留鳥 1 D 森林・林縁・庭園 目録1
一年を通してごく普通にみられ、営巣も確認されている。

29. Bombycillidae レンジャク科

59. *Bombycilla garrulus centralasiae* Poljakov キレンジャク (Bohemian Waxwing)
冬鳥 A 26 Mar. 2004 (10) 林縁 目録3
冬季ごく稀に観察される。
60. *Bombycilla japonica* (Siebold) ヒレンジャク (Japanese Waxwing)
冬鳥 O 26 Mar. 2004 (2); 16 Jan. 2013 (5); 13 Feb. 2013 (20+) 庭園・林縁 目録1
1 近畿: PA (W)
冬季稀に観察される。2013年の冬は多数が飛来した。

30. Sturnidae ムクドリ科

61. *Spodiopsar cineraceus* (Temminck) ムクドリ (White-checked Starling)

留鳥 1 D グラウンド・庭園 目録 2 (漂鳥)

ごく普通にみられ個体数も多いが、秋から冬にかけては岡田山から姿を消すことが多い。この時期は低地の河川や水田が残る地域に移動し、大きな群となって生活しているようである。繁殖期にはグラウンド等で多くの若鳥が観察される。

31. Muscicapidae ヒタキ科

62. *Zootbera dauma aurea* (Holandre) トラツグミ (Scaly Thrush)

漂鳥 R Feb.-Mar. 1992 (1); Feb.-Apr. 1993 (1); 12 Mar. 2005 (1); 4 Mar.-2 Apr. 2010 (1); Jan.-Mar. 2011 (1) 森林・林縁 目録 1

冬季稀に観察され、1箇所越冬することが多い。

63. *Turdus cardis* Temminck クロツグミ (Japanese Thrush)

夏鳥 2 O 17 Oct. 2006; 28 Apr. 2010 (m. 1); 14 May 2010 (m. 1) 森林 目録 2

春・秋の渡りの時期に稀に観察される。

64. *Turdus obscurus* Gmelin マミチャジナイ (Eyebrowed Thrush)

旅鳥 S 22-23 May 2006 (群); 17 Apr. 2012 (3+); 19 Apr. 2013 (群) 森林 目録 3

春の渡りの時期に通常群で飛来する。最近ほぼ毎年観察されている。

65. *Turdus pallidus* Gmelin シロハラ (Pale Thrush)

冬鳥 S 森林・庭園 目録 1

冬季、林内や庭園にごく普通にみられる。

66. *Turdus chrysolaus chrysolaus* Temminck アカハラ (Brown-headed Thrush)

漂鳥 R Apr. 1992; 22 Apr. 2003 (f.1); 29 Apr. 2009 (群); 15 Apr. 2013 (m.1) 林縁 目録 1

冬季から春の渡りの時期に、単独または少数の群で稀に観察される。

67. *Turdus naumanni eunomus* Temminck ツグミ (Naumann's Thrush)

冬鳥 S グラウンド・庭園 目録 1

冬季、グラウンド等に普通にみられるが、とくに1月-2月の厳寒期に多い。

68. *Luscinia akabige akabige* (Temminck) コマドリ (Japanese Robin)

夏鳥 2 A 16 Apr. 2009 (v); 17 Apr. 2013 (v) 森林 目録 3 兵庫: B (P)

春の渡りの時期に、谷門の森でごく稀に囀りが聴かれている。

69. *Luscinia cyane bochaiensis* (Shulpin) コルリ (Siberian Blue Robin)
 夏鳥 2 A 森林 Apr. 1991 (v); May 1993 (f. 1落鳥) 目録 1 兵庫: C (P)
 春の渡りの時期に、ごく稀に観察されている。
70. *Tarsiger cyanurus cyanurus* (Pallas) ルリビタキ (Red-flanked Bluetail)
 漂鳥 R 林縁・森林 目録 1
 毎冬、少数個体が飛来し、林内や林縁で越冬している。
71. *Phoenicurus auroreus auroreus* (Pallas) ジョウビタキ (Daurian Redstart)
 冬鳥 S 庭園・林縁 目録 1
 毎冬、10羽程度が飛来して越冬する。庭園や林縁などの環境を好み、刈り込まれた庭木の茂みをすみかとするものが多い。
72. *Saxicola torquatus stejnegeri* (Parrot) ノビタキ (African Stonechat)
 夏鳥 2 A Oct. 1994 (f. 1) 林縁 目録 1
 秋の渡りの時期に、ごく稀に観察されている。
73. *Monticola solitarius philippensis* (Müller) インビヨドリ (Blue Rock Thrush)
 留鳥 2 R Mar.-July 2010; Apr.-June 2011 建物
 2010年および2011年の春から初夏に、門戸岡田町付近に番いがみられ、営巣は確認できていないが、巣材を運ぶ姿が観察されている。1990年代後半から、門戸厄神駅西側の高層マンションに定着している。
74. *Muscicapa griseisticta* (Swinhoe) エゾビタキ (Grey-spotted Flycatcher)
 旅鳥 O 30 Aug. 2004 (1); 13 Oct. 2005 (1) 庭園 目録 3
 秋の渡りの時期に、ごく稀に観察されている。
75. *Muscicapa sibirica sibirica* Gmelin サメビタキ (Dark-sided Flycatcher)
 夏鳥 2 O 17 Oct. 2006 (1); 27 Apr. 2010 (1); 29 May 2012 (1) 林縁
 春と秋の渡りの時期に稀にみられ、春の渡りの際には複雑な声で囀っている。
76. *Muscicapa dauurica dauurica* Pallas コサメビタキ (Asian Brown Flycatcher)
 夏鳥 2・留鳥 1 O 11 July 1993 (im. 1); 3 Nov. 1993 (5); 30 Aug. 2003 (1) 林縁 目録 3 兵庫: C (B, P)
 秋の渡りの時期にごく稀にみられるが、1993年7月には幼鳥が観察されている。

77. *Ficedula narcissina narcissina* (Temminck) キビタキ (Narcissus Flycatcher)
夏鳥 2 R 2 Oct. 2003 (m. 1, f. 2); 19 Oct. 2005 (f. 1); 17 Oct. 2006 (f. 1); 31 May 2011 (v); 7-24 June 2011 (S) 森林 目録 2 兵庫: PA (P)
春の渡りの時期にはほぼ毎年観察され、秋季にも若干の記録がある。2011年には、南山で6月下旬まで囀りが聴かれたが、繁殖は確認できていない。

78. *Cyanoptila cyanomelana cyanomelana* (Temminck) オオルリ (Blue-and-white Flycatcher)
夏鳥 2 R 4 Oct. 2011 (f. 1) 森林・林縁 目録 1 兵庫: PA (P)
春の渡りの時期にはほぼ毎年観察され、秋季にも稀に観察されている。

32. Passeridae スズメ科

79. *Passer montanus saturatus* Stejneger スズメ (Eurasian Tree Sparrow)
留鳥 1 D グラウンド・庭園・森林・建物 目録 1
構内各所でごく普通にみられ、繁殖も確認されている。

33. Motacillidae セキレイ科

80. *Motacilla cinerea cinerea* Tunstall キセキレイ (Grey Wagtail)
留鳥 2 R 林縁 目録 1
四十谷川やエッジウッド館周辺の路上などでやや稀に観察されるが、3種のセキレイ属では最も少ない。目録 1 には、「よく姿をみかける」とあり、枯れ草を集めている姿も観察されているので、昔は付近のどこかで繁殖していたものと思われる。

81. *Motacilla alba lugens* Gloger ハクセキレイ (White Wagtail)
留鳥 3 C グラウンド・庭園・建物 目録 3
ほぼ通年観察されるが、秋から春の冬を中心とした季節に多い。グラウンド等にたいてい番いでみられ、繁殖期にも観察されているが、繁殖は確認していない。3種のセキレイ属では、現在最も普通にみられるが、目録 1, 2 に記録がない。

82. *Motacilla grandis* Sharpe セグロセキレイ (Japanese Wagtail)
留鳥 2 C 建物・グラウンド 目録 3
1995年の阪神淡路大震災の前までは、大学の建物の屋上などでよく囀っていたので、屋根の隙間などで繁殖していたものと考えられる。建物を補修した際に屋根の隙間が無くなったためか、その後はあまりみられなくなったが、現在でも繁殖期にしばしば囀りを聴く。

83. *Anthus hodgsoni hodgsoni* Richmond ビンズイ (Olive-backed Pipit)
漂鳥 R 11 Jan. 1992 (2); Feb. 1994; Apr. 1996; 17 Apr. 2013 (2) 庭園 目録 1
冬季または春の渡りの時期に稀に観察される。目録 1 には「よく見ることが出来」とあるので、1980年代頃まではもっと多かった可能性がある。

34. Fringillidae アトリ科

84. *Fringilla montifringilla* Linnaeus アトリ (Brambling)

冬鳥 O Feb.-Apr. 2009 (15+) 庭園・グラウンド 目録 1

冬季、ごく稀に観察される。2009年の冬には十数羽の群が飛来し、長期間滞在した。

85. *Chloris sinica minor* (Temminck & Schlegel) カワラヒワ (Oriental Greenfinch)

留鳥 1 C 林縁・庭園 目録 1 (漂鳥)

ほぼ通年観察されているが、早春から初夏の繁殖期に比較的多い。若鳥が見られることもあるが、営巣は確認できていない。

86. *Carduelis spinus* (Linnaeus) マヒワ (Eurasian Siskin)

冬鳥 R 14 Apr. 1993 (7+); Feb. 1995 (35+); 26 Dec. 2003 (15); 11 Mar.-19 Apr. 2013 (9) グラウンド・庭園・森林 目録 3

冬季、稀に観察され、群で飛来する。2013年の群は春、コナラの花序を採食していた。

87. *Coccothraustes coccothraustes japonicus* Temminck & Schlegel シメ (Hawfinch)

冬鳥・漂鳥 S 森林・林縁 目録 1

冬季、ごく普通にみられる。近年、越冬個体数が増加傾向にある。

88. *Eophona personata personata* (Temminck & Schlegel) イカル (Japanese Grosbeak)

留鳥 3 S 森林 目録 1 (漂鳥)

3月から4月にかけて、10羽前後の群をよくみかけ、囀りも聴くことができるが、構内での繁殖は確認されていない。

35. Emberizidae ホオジロ科

89. *Emberiza cioides ciopsis* Bonaparte ホオジロ (Meadow Bunting)

留鳥 3 A 2 Mar. 2009 (2) 林縁 目録 1

目録 1 には、学内各所で特徴的な囀りが聴けたことが記されているので、1980年代頃までは岡田山でも繁殖していたものと考えられる。しかし、現在は秋から春にかけての時期にごく稀に観察されるに過ぎない。森林の遷移が進んで、草原的な環境が無くなったのが原因と思われる。西宮市山田町や甲山周辺には現在も普通に生息している。

90. *Emberiza rustica latifascia* Portenko カシラダカ (Rustic Bunting)

冬鳥 O 4 Nov. 2003 (1); 18 Jan. 2005 (1); 28 Dec. 2005 (2) グラウンド 目録 3

冬季、ごく稀に観察される。グラウンドでスズメの群に混じってみられることがある。

91. *Emberiza elegans elegans* Temminck ミヤマホオジロ (Yellow-throated Bunting)
 冬鳥 A Feb.-Mar. 1994 (2) 庭園 目録1 近畿：NT (W)
 冬季、ごく稀に観察されるが、最近はみられない。甲山周辺には現在も生息している。
92. *Emberiza spodocephala personata* Temminck アオジ (Black-faced Bunting)
 漂鳥 S 庭園・森林 目録1
 冬季、学内各所の森林や林縁に渡来し、たいていは番いで行動する。4月下旬には囀りも聴かれる。
93. *Emberiza variabilis* Temminck クロジ (Grey Bunting)
 漂鳥 A 22 Apr. 2005 (m. 1); 16 Feb. 2008 (1) 森林 目録3 兵庫：C (W)
 冬季および春の渡りの時期に、谷門の森でごく稀に観察される。

引用文献

- 浅川真理・越尾淑子・湯山隼之助・亀井裕幸・大澤 力・宮澤弘二・菊池健夫・中村信也. 2003. 東京家政大学板橋キャンパスの鳥類. 東京家政大学博物館紀要, 8: 155-163.
- 江崎保男・和田 岳編著. 2002. 近畿地区・鳥類レッドデータブック—絶滅危惧種判定システムの開発. 225pp. 京都大学学術出版会, 京都.
- 原田 洋・高瀬頼子・一澤 圭. 1998. 横浜国立大学構内の鳥類目録. 横浜国立大学環境科学研究センター紀要, 24: 137-139.
- 藤田和夫・笠間太郎・市原 実・粉川昭平. 1959. 西宮地方の地質と構造—その自然史一. 「西宮市史, 第1巻」(魚澄惣五郎編), 174-316. 西宮市役所.
- 兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課編. 兵庫の貴重な自然—兵庫県版レッドリスト2013(鳥類). ひょうご環境創造協会, 神戸.
- 池田昌枝・本村 健・石井良明・内藤典子・藤田 剛. 1991. 南関東都市部におけるチョウゲンボウの繁殖状況と環境特性. *Strix*: 10: 149-159.
- 生稲慶子・中村雅彦. 2010. 上越教育大学構内の鳥類相. 上越教育大学研究紀要, 29: 269-279.
- 井上龍一. 1990. 大学構内の鳥類. 「奈良教育大学の自然—動植物編一」. 78pp. 奈良教育大学, 奈良.
- 石田 朗・松沢友紀・亀田佳代子・成末雅恵. 2000. 日本におけるカワウの増加と被害. 一地域別・問題別の概況と今後の課題一. *Strix*, 18: 1-28.
- 甲山森林公園の野鳥. <http://bcaweb.bai.ne.jp/sashiba/index.htm> (2013.8.27参照)
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 生物多様性情報システム, 絶滅危惧種情報. http://www.biodic.go.jp/rdb/rl2012/redList2012_tyorui.csv (2013.8.27参照)
- 片山涼子・秋山由子・大畑貴史・石川裕貴・岡野めぐみ・千田海帆・高良真侑子・原田隆成・堀内洋平・松田すみれ・桜谷保之. 2012. 近畿大学奈良キャンパスにおける野鳥群集の季節的・年次的変動(2) 1995年~2010年の調査結果. 近畿大学農学部紀要, 45: 17-46.
- 川西美和. 1996. 奈良教育大学構内における鳥類相について. 奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要, 1: 33-46.
- 河崎昌子・石渡満重・篠田良子・下田摩利. 1981. 相模原の鳥類調査(1)—相模女子大学構内の鳥類について一. 相模女子大学紀要, 45: 193-200.
- 神戸女学院百年史編集委員会編. 1976. 神戸女学院百年史, 総説. 507pp. 神戸女学院, 西宮.
- 神戸女学院環境保全委員会編. 1982. 岡田山の野鳥. 「増補改訂岡田山の自然」, 194-195. 神戸女学院, 西宮.

- 黒沢高秀・塘 忠顕・菊池壮蔵. 2010. 福島大学金谷川キャンパスの生物多様性とその保全策の提言. 福島大学地域創造, 22:103-128.
- 箕輪義隆・田淵俊人・内藤典子. 1993. 玉川学園鳥類目録. 神奈川県自然誌資料, No. 14: 15-25.
- 茂木哲一・大前昌子・柳井重人. 2004. 都市域の大規模緑地における鳥類生息の実態について—千葉大学松戸キャンパスを対象として—. 環境情報科学論文集, 18: 535-536.
- 村田麻理恵・中森純也・永松 大. 2011. 鳥取大学鳥取キャンパスの鳥類相と季節変動. 山陰自然史研究, No. 6: 25-36.
- 中村一恵. 2013. 日本列島におけるセキレイ属近縁2種の分布変遷と種分化. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), 42: 71-90.
- 日本鳥学会(目録編集委員会)編. 2012. 日本鳥類目録, 改訂第7版. 438pp. 日本鳥学会, 三田.
- 日本野鳥の会編. 2001. 自治体担当者のためのカラス対策マニュアル. 135pp. 環境省自然環境局.
- 西 教生. 2007. 都留文科大学キャンパス周辺の鳥類相とその変化. 都留文科大学大学院紀要, 11: 1-12.
- 野崎玲児. 2010. 神戸女学院岡田山キャンパス自然環境学術調査報告書. 45pp. 神戸女学院, 西宮.
- 野崎玲児. 2013. 大学キャンパスが守る街の自然環境—兵庫県西宮市—. 大学時報, No. 352: 88-89.
- 沼里和幸. 1985. 生田緑地における野鳥の生態的分布. Strix: 4: 13-25.
- 岡田山の自然編集委員会編. 1974. 岡田山の生物目録. 「岡田山の自然: 六甲山東麓の生物とその生態」, 89-130. 神戸女学院百周年記念「岡田山の自然」出版委員会, 西宮.
- 齋藤武馬・西海 功・茂田良光・上田恵介. 2012. メボソムシクイ *Phylloscopus borealis* (Blasius) の分類の再検討—3つの独立種を含むメボソムシクイ上種について—. 日本鳥学会誌, 61: 46-59.
- 桜谷保之. 1996. 近畿大学奈良キャンパスでみられる野鳥類. 近畿大学農学部紀要, 29: 27-37.
- 桜谷保之・後藤桃子・小西恵実・福原宣美・岡田絢子・東 寛子・八代彩子. 2008. 近畿大学奈良キャンパスにおける野鳥群集の季節的・年次的変動. 近畿大学農学部紀要, 41: 45-75.
- 佐藤隆士・岡村まゆみ・小林達明・野村昌史. 2003. 園芸学部の鳥類相と季節推移. 千葉大学園芸学部学術報告, 57: 17-25.
- 佐藤友哉・石川康宏・関 晋平・吉田裕樹・馬場好一郎・藤吉正明. 2007. 東海大学湘南キャンパスにおいて観察された鳥類. 神奈川自然誌資料, No. 29: 73-82.
- 申 七郎. 2004. 名古屋聖霊学園キャンパスの野鳥. 名古屋聖霊短期大学紀要, 25: 101-103.
- 高野伸二. 2007. フィールドガイド日本の野鳥, 増補改訂版. 374pp. 日本野鳥の会, 東京.
- 竹内将俊・小島宏海・渡辺昌也. 2010. 東京農業大学世田谷キャンパスの鳥類相. 東京農業大学農学集報, 55: 115-122.
- 東京農工大学野鳥研究会編. 1980. 東京農工大学構内鳥類記録 I, 1963-1979. 63pp. 東京農工大学野鳥研究会, 府中.
- 堤 将和・松沢安夫. 1990a. 農学部キャンパスの野鳥 (1988~1989). 第1報, 生息環境と野鳥の種類. 茨城大学農学部学術報告, 37: 103-114.
- 堤 将和・松沢安夫. 1990b. 農学部キャンパスの野鳥 (1989~1990). 第2報, 生息環境の変化と野鳥の種類(その1). 茨城大学農学部学術報告, 38: 121-125.
- 内田康夫・鳥津秀康・関本兼曜. 2003. 都下自由学園周辺の鳥相変化と環境変動—長期羽数調査の統計分析から—. Strix, 21: 53-70.
- 植田睦之・加藤和弘・松野葉月・黒沢令子・成末雅恵. 2004. 東京の鳥類相の変化とその要因. Strix, 22: 1-20.
- 山田信夫・高見康江. 1986. 兵庫女子短期大学構内の野鳥. 兵庫女子短期大学研究集録, 19: 33-35.
- 山階芳麿. 1941. 日本の鳥類とその生態, 第2巻. 1080pp. 岩波書店, 東京.

(原稿受理日 2014年3月3日)